

一般部門 優秀賞

随筆『一日暮し』

織田 香寿子

はなはだ前になるが、『雁の寺』『飢餓海峡』は読んだ事があるのでそのいづれかを読み込みたくて図書館へ行った。しかし生憎なくて随筆の『一日暮し』に惹き付けられた。一章目の文章が私をとらえた。一部分を紹介します。

「たった一日でよい。あすも、あさっても生きたいと思うから、この世がめんどうになる。今日一日を何とか、人に厄介（やっかい）をかけず、健康ですごせたらと、そればかりの工夫なら、あてがはずれても一日のことだから、雨でも嵐でも、まあ辛抱できるというものだろう」と書かれてありました。

夫が亡くなってから息子に先立たれた姑の嘆きに堪えながら、五年余り在宅介護をしていた。あの頃は夜も普通に眠ることが出来ずもう、体が潰れると感じていた一ヶ月後に姑は九十九歳で嫁の私を拜んで逝ってしまった。平成二十五年の二月から一人暮しになり六年余り、五月に新年号の令和がはじまり新しい心持で暮せるかと思いはあったけれど、生きている事に無意味さを感じ、辛い。夫の歳を六年超えたし、もういいかと漠然と思う日が続いた。その気持を変えてくたさったのが、一日暮しだから、「さようなら」と死ぬようなあいさつをして寝る。そして翌目が覚めたら生き返った気分、何か儲けたような気がするという水上勉氏の思いに深く共感する。生きているのは一日でよいと思うようになってから、朝がくればわくわくするようになったとも言われる。

中国の新興県の村の山道の途中で、農婦が坂道を天秤をかつぐのに重い野菜をうしろ籠に山積みにして、前の籠には大そうな石を積んでいたのに遭遇したとのこと。天秤をかついだ事はないが、それでも解る気がする。実際に運びたい重い荷と同じ重さの荷を前にかつげば天秤は平衡になり、実際の荷が軽く感じて歩きやすい事が。生きているのが辛いと唯、一日を過ごすよりその辛さとつり合う何か、ご近所とか友に喜んでいただける事をすれば私の辛さの天秤は軽くなると気が

付いた。毎日の食事を取れない病の身でもないし、雨、風をしのぐ家もある。はつきりと言って私は贅沢な悩みに苦しんでいるのだ。

この『一日暮し』の随筆は長文で後半は仏教がらみの哲学的になり読み応えがあります。内容は難しいですがそれとなく理解できました。一人暮しで急に病気になる時を想うと不安が募りますがその不安が薄らぎました。禅宗に帰依した正受老人の生き方を心根に持たれた水上勉氏が心筋梗塞で生死の境をさ迷うこと三・四日経て生き還れた集中治療室での出来事や看護婦さんとの会話が心に深くのこりました。一部分、抜粋します。「わたしが看護婦さんに向って、死んでゆく人の音をきくのは悲しく淋しかったと訴えると、年配の看護婦さんは、『そんなことをお考えになれるほど健康をとりもどされてよかったですわねエ』といった」「禅宗坊主なら、ここで喝を喰らったように思える一瞬だったろうか」と書かれてありました。

生きていることに挫けそうになったら、再度『一日暮し』を読んで喝を入れたい。